

# 山と博物館

第31巻 第8号

1986年8月25日

大町山岳博物館



## 黒部川・平の渡し

昭和十二年に勃発した蘆溝橋事件は次第に拡大し、ついに大東亜戦争にまで発展し、青年たちは次々に召集され、物資は欠乏していった。そこで我々も何時召集されるかと懸念するようになった。

その頃、山と写真で親交のあった馬場忠三郎君と相談して、夏山撮影のプランを決めた。昔、富山城主・佐々成政が大勢の家来を連れて、冬の針之木峠を越えての難行を思えば、近代は登山道の開発や、山小屋の整備のため私たちは大変恵まれているので、信州側からの逆コースを進むことにして、出発したのは昭和十六年英米と開戦した年の八月二十二日の朝だった。

登山や写真が飯より好きという気の合った二人ぼっちの撮影旅行であった。

上田から汽車で大町駅で下車し、大沢小屋まで登り、一泊し、翌朝七時半に出発して、針之木峠を越えて下って行くと、そこには水量の多い黒部川の清流が滔々と流れていた。

見ると危しげな吊り橋が架かっていた。

何とも原始的な怖そうなもので、渡る度に揺れがすごいので、一人ずつ渡ることにした。私が先にどうやら渡り、対岸から愛機ローライフレックスを構えサインすると、ニッカーズボンに登山靴、さらにサブリュックを背負った忠さんは悠々と渡って来た。その瞬間をキャッチし、近くの素朴な平小屋へ着いたのは午後三時ごろだった。

小屋の親父は私共の着いたのを非常に喜ばれ、あつという間にたくさんの「イワナ」を釣り上げられ、夕食には串さしの塩焼きや、刺身までたんまりご馳走になった。

翌日は五色小屋まで足を伸ばし、一の越、雄山、続いて別山乗越で泊まり、剣の山頂を極め、再び別山で泊まり、富山まで出てのんびりした撮影行を無事終了したのである。

あれから四十五年も経った現在、この平の渡しの写真を見る度に在りし日の畏友忠さんや、平小屋の親父を憶い出すのである。

(日本山岳写真協会名誉会員 柴崎高陽)

黒部川平の渡し (S 16.8.23) 撮影 柴崎高陽

# 日本・中国合同登山研修会 中国チベット・チャンツェ峰

松原 繁

## 合同研修会の経過概要

一九八〇年、中占春現中国登山協会主席他四名の登山協会の幹部が、同年、世界で初めて外国隊として登頂に成功した日本山岳会チヨモランマ隊の祝賀会に出席のために来日され、その時に長野にも立寄られ、日中合登研一〇年計画が約束された。その第一次として、一九八一年、九名の中国登山協会の代表を迎え、長野県の山岳で約一ヶ月の研修を行い、非常に高い成果をあげることができた。その成果を中国登山協会では、中国登山の発展と近代化にきわめて適切かつ有効と評価し、第二次日中合登研を日中国交正常化十周年記念事業と位置づけ、中国新疆ウイグル自治区内天山山脈ボグダ峰において、日本隊員四名、中国隊員二三名で実施され、日中登山協会の交流と発展に多くの成果をあげることができたのである。一九八三年、第三次として、王富州隊長以下一五名が来日し、隊員の中に初めて七名のチベット族隊員が含まれていた。この中に、今回のチャンツェ峰合登研の中国登山隊長をつとめた仁青平措「ピンツェオ」さんがおられ、この次はチベットヒマラヤで合登研をやるから是非来るようにと誘われ、チベットへの夢が大きくふくらんだ。第四次は、一九八四年、中国青海省のアムネマチン二峰(六二六八m)に日中隊員一七名の登頂に成功し、中国登山協会は、この研修は一二

〇%の成果を収めた」と評価された。第五次は、昨年中国登山協会副主席許競氏を顧問に、チベット登山協会の副主席ゴンブ隊長以下一七名が来日され、内九名は八〇〇〇mの経験を持つチベット族の隊員で、「来年は私達がホストです。ラサで再会しましょう。」と約束して帰国した。そして今回、第六次として、中国チベット・チャンツェ峰(七五五三m)において研修会を行うことになったのである。

〇%の成果を収めた」と評価された。第五次は、昨年中国登山協会副主席許競氏を顧問に、チベット登山協会の副主席ゴンブ隊長以下一七名が来日され、内九名は八〇〇〇mの経験を持つチベット族の隊員で、「来年は私達がホストです。ラサで再会しましょう。」と約束して帰国した。そして今回、第六次として、中国チベット・チャンツェ峰(七五五三m)において研修会を行うことになったのである。



ベースキャンプびらき

## 落ち込んだ二〇日間

富士山の合宿や冬の後立山一週間の合宿、八ヶ岳での固定ロープや氷雪トレイニングをしながら、個人装備や中国隊員へ支給する装備を調達したり、食糧計画やその他の物資の調達に忙しい毎日が続くなか、一番頭を悩ましたのは高所順応である。海拔0mに近い所から三八〇〇mのラサヘジェット機で入り、わずか一週間で五一五〇mのベースキャンプに入らなければならぬ。しかも、キャラバン隊ではなく自動車隊である。この対応については信大の低圧実験室での体験や、高所医学の専門書等で少し見通しをつけることができたが、日本隊一七名の中に七〇〇〇mを体験した人は一人もおらず、体験者に聞くがなかなか実感として理解できないのが実状であった。三月初め、最終的な隊員チェックで、登山隊参加の誓約書と二〇数項目にわたる健康診断書の提出が求められた。私は人一倍健康であると自負していたので、気軽な気持ちで健康診断を受けたのだが、その結果は、心臓に異常あり、高所での登山活動は保障できないとのこと。なんとも無情な診断書の内容である。ほんとにそうなのかと機械が信用できず、他の病院でもう一度検査を受けたが結果は同じであった。毎日に自分は心臓が悪いのだと思いつくやうになり、夢も希望もここで終りかた、隊員会議に参加してもむなしの気持ちであった。家庭の中にも重苦しい空気がただよび始めた。みかねた妻が、もう一度診てもらったらとすすめる。あまり気持は進まなかったが、自分が納得するためにドクターの話をじっくり聞くことが必要ではないかと思いついて、心電図室に入った。結果はそれほど異なっていないが、この波型が必ずしも高

所の活動に影響するとは思えないし、そのデータは無いとのこと。ああ良かった、少しあかりが見えてきた。それから数日後、高所医学の専門医をむかえて、高所障害とその対応についての勉強会があり、私が長野で受けたカルテを前にして、「松原さん、だいぶ落ち込んでいますよ。むしろ高所では一番強いかもしれません。」とのこと。「先生、私をチベットの土にするつもりか」と半信半疑で言うと、「そんなことより、副隊長のとめの方が大事ですからね。」と一言。ヒマラヤ登山を何回も経験し、古くから親交があったドクターのこの言葉に腹の底から嬉しさがこみあげてきた。あと二〇日で出発だ。痛い歯も治して行こう。

## ああ! 酸素がほしい。

北京から二六〇〇km、途中四川省の成都に一泊してここチベットのゴンク空港に到着、一時間後チベットの首都ラサ市へ。町では沢山の関係者が歓迎してくれ、次から次へと顔見知りの中国の友人達が寄って来ては、かたく抱き合い再会を喜び、登頂の成功を誓い合う姿は異国とは思えないほどなごやかな雰囲気だった。しかし、その日の夕方から、隊員の中に頭痛やだるさ、むくみを訴えたり、食事を受けつけないものも出てきた。心配した高山病の兆候である。体を休め、水分を多くとるしか方法はない。葛西ドクターは初日から大忙しである。私は実験用に、二四時間マイト心電計を取付け、五一五〇mまで五回モルモットになることを約束した。一つは、私の体を心配してのことでもあり、もう一人との比較も必要であったためであろう。堀内

隊長は酸素を吸いながら日本へ手紙を書く。高校の国語の先生が漢字を忘れたときききたり、のたり、ごろりと、なまけ者の集団のようである。最初から順応のトレーニングは不可能になってしまった。それでも数人の隊員は元氣もよく、夕食にでるビールはいつも空になった。なかでも広島出身の平田副隊長はいたってビールをよく飲み、自動車キヤラバン最後の町シユガールまで快調であった。隊荷の確認、中国隊員への支給の装備も無事完了。四月二〇日、いよいよ出発である。日本製のバスとジープに乗ってのキヤラバンである。途中四九二八mのカロー・ラ峠を越え四四〇〇mのヤムドク湖を見ながら、荒涼としたチベット高原を走ること一〇時間、チベット第二の都市シガツツエに到着。外国人専用のすばらしいホテルである。シガツツエ三八〇〇mも、ラサと同じく春はまだという感じ。一ヶ月後にここに戻るときには、美しい緑を見ることができよう。四月二二日、右の丘の上に、タシルンポ僧院を眺めながらシユガールに向かい、高所順応のためここに



登山まえの祈願祭

三日間の滞在である。ベースキャンプに入ると、ここまで下ることは不可能に近いからである。しかし、順応のために近くの僧院に登ったり、散歩をしたりするが隊員の体調は良くはならない。毎日、ドクターに提出する自己診断表を見ながら不安が募る一方である。明日はいよいよベースキャンプに向け出発である。未知の世界に期待と不安をめぐらしながら、うとうとしていると、突然に平田副隊長が、チェーンストーク呼吸(間欠的過大呼吸)を起こし、苦しうなうなっている。いそいでドクターを呼び脈拍を診ると、一分間に一二〇である。同室の隊長も体調が悪く酸素を吸っていたので、予備の酸素袋(ゴム製の酸素容器で中国隊が緊急用に軍隊から借用了)を使用し、朝まで様子を見ることにした。しかし、朝になっても二人は回復せず、ドクターストップである。二人は、シガツツエの軍の病院に入院することになり、私が隊長をつとめることになった。

あこがれのロンブク氷河

堀内隊長と平田副隊長に見送られ、ベースキャンプでの再会を約束して早朝の出発である。トラック2台、ジープ2台、トラックには隊荷を積み、その上に日中の隊員が分乗して砂塵のキヤラバンである。中・ネ友好道路で検問を受ける。このまま進めばティンリ大草原を経てネパールのカトマンズに着くはずである。いつかまた通ってみたい道である。途中からチヨモランマ街道に入る。この自動車道は、一九五〇年の日本山岳会のチヨモランマ隊の協力で開通した道路で、一九七五年の中国チヨモランマ隊は、シガールからベースキャンプまで一ヶ月のキヤラバンを要した



東ロンブク氷河中央モレーン帯

そうである。それが今では八時間である。五〇八〇mのジャウ・ラ峠でのチベットヒマラヤ連峰の眺めはすばらしく、めざすチャンツエも、チヨモランマの胸にいだかれるように白くかがやいてみえる。最奥の村チヨゾンを通ぎロンブク川をさかのぼり五一〇〇mのロンブク僧院に到着した。かつては遠くインドからの巡礼者もあつたほどで、チヨモランマのふもとにあるロンブク僧院で祈りをささげられることは、下界での煩惱がいちはやく取り除かれると思われていたからであろう。新中国の建設と共に、一時廃墟と化したのが、今は一部修復されて、二人のラマ僧と、彼等の面倒を見るおばあさんが二人住んでいる。午後三時、ベースキャンプに到着した。先発隊のピントオ登攀隊長以下数名の中国隊員が、すでにベースキャンプの設営を終り、前進キャンプ六〇五〇mの設営に出発したという。なに

か申し訳ない気持である。ほこりまみれのトラック隊も無事到着し、BCからのチヨモランマや、めざすチャンツエ峰の雄姿に全隊員が感激している。大型テントの窓を開くと、チヨモランマの北面が全望できる位置にテントを設営してある。中国側の配慮に、また頭が下がる思いである。

ベースキャンプの生活

四月二四日、昼からテント村開きである。日中隊員の協力により、チャンツエ峰登頂の成功を誓い合い、日の丸と五星紅旗を掲揚し、明日からの登山活動への意を新たにす。テント生活の一日は、ニイハオの声と共に大きなヤカンに入ったカイスイが運ばれてきて始まる。「氷河の水を沸騰させたお湯」。テントの中心を通路に左右に鶏舎のようにシラフから顔を出し、思い思いにコーヒーや紅茶を作って飲み、それから食事である。メニューはパンとゆで卵、バターお粥、野菜いため、ソーメン。スベシャルは、ヤクの肉入りうどんである。中国隊員はこの他に、麦を炒った粉をバター茶でこねて羊の干肉をナイフで削って食べる。この干肉は我々の口にはとてもあわない。数日間は休養と高所順応である。サイドモレーンに登ったり、ロンブク氷河を溯り、中央ロンブク氷河や東ロンブク氷河へ順応を兼ねた一日行程の散歩である。しかし何人かの日本隊員は順応できず、食事もとれない状態である。行動中でも、休息時には輪になってバクチに興じる中国隊員とは大変な違いである。隊長、副隊長も全快して、BCに到着。ひさしぶりに全隊員が揃い、いよいよ明日から前進キャンプに入り、アタック開始である。





チャンツェ氷河上部大クローワール

**登頂**  
前進基地は、チャンツェ氷河の入口六〇五〇mに設置され、隣りにはチョモランマの北東稜に挑んでいるスペイン隊の中継テントもある。美人の隊員との交流も楽しいひとときである。ピンツォ登攀隊長と宮本登攀隊長と私で登攀ルートの偵察と、キャンプ位置の選定に、初めてチャンツェ氷河に入る。高度差八〇〇mの大クローワールを登り、六九〇〇m付近にキャンプを設置し、七〇〇〇mのゴールを経て、稜線つたいに頂上に達するという大胆なルートを選んだ。高所登山のセオリーからすると、高度五〇〇〇mにキャンプ一つというのが普通であるが、今回は、無酸素で、早く、しかも大量の隊員を頂上に立たせることで意見が一致したのである。一〇〇〇m巻きの固定用ロープを六〇mに切断したり、アタック食や高所テント、登攀用具の点検に、

双方の隊員の目は登攀意欲に燃えている。五月四日、日中四人ずつのルート作業隊が出発し、六一五〇mにリレーキャンプを設置し、九ピッチ、六四〇〇mまで固定ロープが完了した。しかし、その後三日間は悪天候に阻まれて行動はストップである。登山期間は限られている。また高山病で行動できない隊員もでてきた。少しあせりの色もでてきたが、ピンツォ登攀隊長は、絶対大丈夫だ、心配はいらないと、あいかわらずバクチに興じている。五月八日、ピンツォ登攀隊長が、中国隊員全員でルート作業とC1の設置に行くから、日本隊員は全員休養して頂上アタックにそなえるように、とのこと。しかし、合同隊である以上、我々もルート作業をして、キャンプも設置し、同一の行動をすべきだと主張したが、ピンツォ登攀隊長は穏やかな口調で、「日本隊の気持はよくわかる。しかし頂上に立つための休養は高所登山には最も重要なことだ。体調の良い者が行動するのは当り前だ。我々にまかせなさい。」と言ってくれる。ありがとう、中国隊の活躍に甘えよう。五月八日、天候も回復。一六名の中国隊員は、ルート作業隊員と荷上げとサポート隊員にわかれて、それぞれが発進した。正午過ぎ、大クローワールを突破し、午後二時半、C1地点に到着の無線が前進基地に入る。すばらしいスピードと体力である。頂上へのルートは開けた。ありがとう中国隊員の皆さん。五月九日、いよいよ頂上アタックである。日中八名の隊員が、四つのパーティに分かれC1入りであるが、つちり張られた二一本の固定ザイルをたよりにC1へと進む。六六〇〇m地点からのギヤチンカンの眺めがすばらしい。十歩進んで五分の休息、この繰り返してである。中国隊



チャンツェ頂上にて(右から3人めが筆者)

員は昨日の疲れもなんのその、我々よりも二時間も早くC1に到着し、すでに四つのテントは設置されていた。六九〇〇mでの長い一夜が始まる。それぞれに秘密の食糧を出し合い、コーヒー、紅茶、スープ等水分の補給をし、明日の頂上アタックに胸をときめかす。しかし酸素不足のため、ほとんどの隊員は眠れない様子である。早く夜が明けて青空になつてくれ。五月十日、八時半出発、頂上アタックだ。七〇〇〇mのゴルまで固定ロープを張り、あとは稜線つたいに頂上にむかう。先頭に行く中国隊は、快調なスピードである。日本隊は遅々として進まず、右手に世界最高峰のチョモランマを眺めながら、今まで努力して来たすべてを出しきろう。今日のために頑張ってきたはずだ。私は、最後尾で日本隊員を上げます。午後二時過ぎ、中国隊はすでに頂上近くに達し、大きな声でコールを送つ

て来る。ガンバレ日本隊員。三時三〇分、ついに七五五三mの頂上に立つ。日中の国旗がかかげられ、BCに向け登頂の無線を送る。五人分くらいしかない馬の背状の頂上に十六人が入れ替り立った。チョモランマは雲に隠れたがヒマラヤの山群をはじめ、見おろせば広大な氷河など眺望は圧巻だ。全員が登頂の感激にひたっている。しかし、頂上には長く留まっていられない。長い下降が待っている。C1で第二次アタック隊員から登頂の祝福を受け、二次隊の成功を祈りながら、固定ロープの下降にはいる。最後のロープからユマールをはずし、空を見上げると雪がちらちら舞っている。なにか、胸の中から熱いものがこみあげてくる。そうだ、頂上に立つんだ。成功したんだ。自然に涙があふれてくる。妻や子供の顔が浮かんでくる。次々にこの遠征に心に向けてくれた人々の顔が浮かんでくる。四四才の青春の一ページだ。第二次アタックの日本隊員四名は七三〇〇mまで登り、中国隊員八名は全員登頂である。七五〇〇m以上の高峰に二四名の登頂に成功した例は、世界にない快挙である。夢にみたヒマラヤ行きは終わった。また、いつばいのおこがれやロマンをザックにつめて。

(大町山の会会長)

## 山と博物館第31巻第8号

発行所 長野県大町市 一九八六年八月二十五日発行  
大町市 TEL 〇二二一  
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館  
大町市 大町山岳博物館  
定価 年額一、二〇〇円(送料共(切手不可))  
郵便振替口座番号(長野四一三二九九三)